

8) 和歌山県

内藤麻子（和歌山県立自然博物館）、岡恭行・高須英樹（和歌山大学教育学部）

はじめに

和歌山県におけるタンポポ類の分布については、和歌山大学教育学部生物学教室（1985、1987、1988）による県下全域を対象とした調査のほか、和歌山市（1980、2001）、海南市（1983）、田辺市周辺（1985）など、調査対象地域を市町村単位に限定して実施された経緯がある。今回、「タンポポ調査・近畿 2005」の継続調査及び、自然博物館を拠点とした県民参加型調査の普及を目的として、「タンポポ調査・西日本 2010」実行委員会に参加し、和歌山県全域を対象としてタンポポ調査を実施した。

(1) 調査への取り組み

和歌山県立自然博物館を拠点とした調査体制を組織し、紀北・紀南各地の博物館施設・ビクターセンター等に対し、調査用紙の配布、サンプルの回収と一時保管を依頼し、和歌山大学教育学部生物学教室において花粉観察と調査用紙の集計を行った。

予備調査・本調査期間中に、和歌山県立自然博物館主催による自然観察会「タンポポ調査に参加しよう」を計2回開催した。予備調査期間中に自然博物館（海南市船尾）において開催した観察会では、学芸員によるタンポポ調査の解説の後、博物館周辺においてカンサイタンポポ、セイヨウタンポポ、アカミタンポポ等の形態的な違いについて説明し、募集定員30名に対し45名の参加者を得た。本調査期間中に県立日高高校（御坊市島）の協力を得て行った観察会では、校内に生育するカンサイタンポポ、セイヨウタンポポ、形態的に雑種タンポポと判断される個体を採集し、室内にて顕微鏡を用いた花粉観察を行った。16名の参加者の他、日高高校生物部員の参加を得た（写真1）。また、タンポポ調査に関連した観察会の他、上富田町岡周辺において、タンポポを中心とした人里植物の観察を目的とした行事「熊野古道の植物観察」を開催した（写真2）。上富田町岡川沿いの熊野古道は、世界的博物学者、南方熊楠に縁ある社寺林の森林観察に適したコースであるとともに、和歌山県に分布する5種類のタンポポを観察することが出来る。シロバナタンポポ、セイヨウタンポポ、アカミタンポポの他、黄花在来タンポポ（カンサイ型・トウカイ型）の違いに注目して観察を行った。



写真1 観察会「タンポポ調査に参加しよう」
(2010年4月 県立日高高校)



写真2 観察会「熊野古道の植物観察」
(2010年3月 上富田町岡周辺)

(2) 調査結果

調査によって得られた総データ数は2072点であった（表1）。このうち、黄花在来種（黄花二倍体種）の占める割合は61.7%、シロバナタンポポは8.4%、外来種（セイヨウタンポポ、アカミタンポポ、不明の外来種、形態的に判断される雑種タンポポを含む）は37.4%であった。頭花の添付が無く瘦果のみ送付されたデータで種名が特定できなかったため不明としたデータは全体の0.9%であった。

表1 調査によって得られたデータ数一覧

	タンポポの種類	データ数	総データ数に対する割合
黄花在来種	黄花二倍体種	1104	53.3%
シロバナタンポポ		175	8.4%
外来種	セイヨウタンポポ	367	17.7%
	アカミタンポポ	40	1.9%
	不明の外来種	368	17.8%
不明		18	0.9%

① 和歌山県におけるタンポポの種類と分布

黄花在来タンポポは、和歌山市から橋本市にかけての紀ノ川流域、和歌山市から東牟婁郡串本町にかけての海岸に面して開けた平野部や河川流域の平野部に分布する傾向がみられる（図1）。また、紀北地域に広範囲に分布するカンサイ型が（旧）田辺市を境に分布域が途切れ、串本町周辺にトウカイ型が局所的に分布する傾向は、2005年の調査と同様であった。シロバナタンポポは県内全域において散発的に分布するが（図2）、紀の川市、日高郡日高川町、中辺路町、本宮町などの、山間部に点在する集落においては、シロバナタンポポしか生育していない集落も確認された。

黄花在来タンポポ（カンサイ型）とシロバナタンポポが県内を大きく二分して分布するのに対し、外来タンポポは県下全域に分布しており（図3）、アカミタンポポはより市街地に限定された分布をみせている（図4）。外来タンポポは平野部の市街地だけでなく、山間部の林道沿いに開けた空き地等にも生育していることが多く、自動車のタイヤなどに瘦果が付着して運ばれている可能性が考えられる。

② 生育環境別にみたタンポポの分布

外来種（セイヨウタンポポ、アカミタンポポ、不明の外来種、形態的に雑種タンポポと判断される個体を含む）は、駐車場や造成地、都市的緑地など、人為による大きな環境変化がなされた環境に多くみられる（表2）。一方、黄花在来タンポポが生育する環境（池の土手、河川の堤防、川原、林や林縁、神社や寺の境内）は、地域住民の奉仕活動等による定期的な草刈りが行われている場合も多く、これらは人間活動による緩やかな攪乱によってタンポポの生育地に適した草地在り保たれた結果であると考えられる。田園地帯が残る和歌山市や海南市の郊外は、市街地拡張による道路拡張や宅地造成によって生じた空き地に生育する外来種の集団と農地に生育するカンサイタンポポの集団の接点となっており、その周辺地域では形態的に雑種と判断されるタンポポが多数観察された。今後の調査においては、市街地拡張に伴って変貌していく地域に赴き、在来種の集団と外来種の集団に混在する雑種タンポポの動向に注意したい。

(3) タンポポ調査から見た和歌山の自然

2005年の調査結果に引き続き、和歌山県においては、和歌山市や田辺市など市街地の発達した平野部を除き、黄花在来タンポポが広範囲の地域に渡り分布することが確認され、特に、林業、果樹栽培を主な生業とする山間部の集落においては、棚田や里道沿いの草地に生育する黄花在来タンポポの群落が顕著に見られる。黄花在来タンポポが群落を成して生育する代表的な自然環境に里地里山が挙げられる（写真3）。里地里山とは、奥山と都市の中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それら

と混在する農地、ため池、草地等で構成される地域概念である。農林業等の生産活動にともなう様々な働きかけが長時間にわたり継続し、その地域が持つ独特の自然環境を反映しながら集落を中心とした里地里山景観が保たれてきた。現在、全国各地において、農山村の高齢化と人口流出による労働力低下に伴い、草刈や間伐等、里地里山環境を維持するための植生管理力が低下しつつある。それに伴い、耕作放棄地の増加によって植生遷移が進行し、黄花在来タンポポが生育する草地が失われつつある。都市と地方の経済格差によって衰退していく地域社会と帯同して消失していく里地里山の生物多様性保全に注目が集まる現在、「人と自然の生産的な営み」の象徴的な存在といえる黄花在来タンポポについて、もう一度、環境指標としての意義を見出したい。

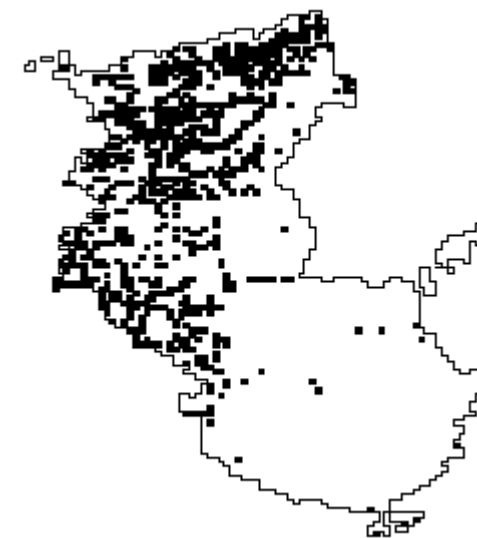
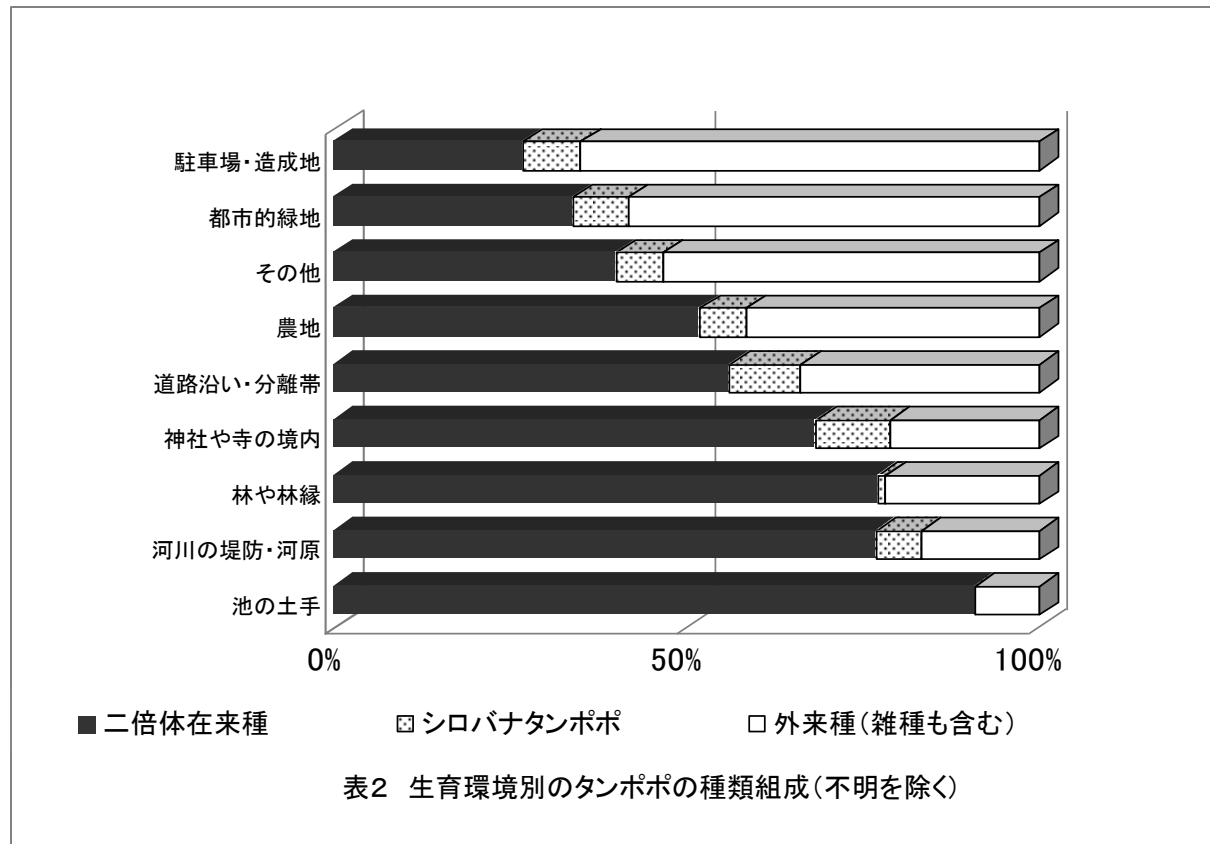


図1 黄花在来タンポポの分布

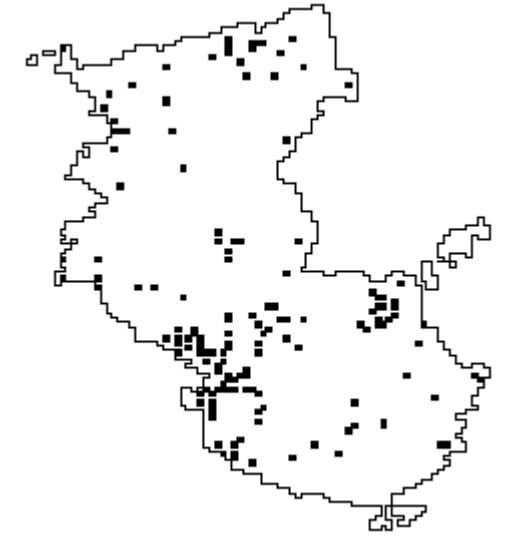


図2 シロバナタンポポの分布

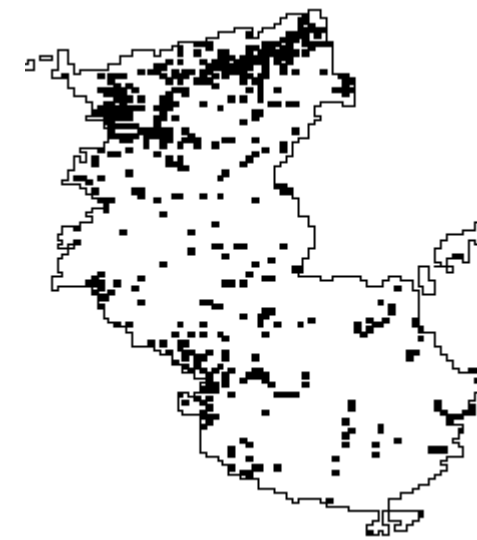


図3 外来タンポポの分布(アカミタンポポ除く)



図4 アカミタンポポの分布



写真3 黄花在来タンポポの生育する里地里山景観(左:海草郡紀美野町 右:海南市)

引用文献

青木敏郎、1985. 和歌山県田辺市周辺におけるタンポポ類の分布について、和歌山県高等学校教育研究会理科部会誌、21 : 6-40.
 増田泰久、2001. 和歌山市におけるタンポポの分布推移、紀州生物、30 : 59-62.
 岡本明浩、1987. 紀伊半島におけるタンポポ属植物の分布と変異Ⅲ、和歌山大学教育学部生物学部卒業論文。
 大橋佳子・西野泰生、1985. 紀伊半島におけるタンポポの分布と変異、和歌山大学教育学部生物学部卒業論文。
 大井俊徳、1988. 紀伊半島のタンポポの分布と変異、和歌山大学教育学部生物学部卒業論文、未発表。
 和歌山県立自然博物館、1983. タンポポからみた海南市の環境、特別展「帰化生物」解説書第1回、45-46。
 和歌山大学自然保護の会、1980. 和歌山市におけるタンポポの分布。